

## 超難解…。しかし読む甲斐はあり？

『ポピュラー芸術の美学—プラグマティズムの立場から』(R・シニスターマン著 秋庭史典訳 勁草書房 本体3400円)

「とりあえず、ラップの本です」と編集部の方から言われて引き受け、この書評だが、家に送られてきた本のページを開いてみてビックリ。うーん、難解…。大学の教授である哲学者によって書かれたこの本は、題名の通り、主として高級芸術に対するポピュラー芸術の真の芸術的価値について述べている。当然、すべてのポピュラー芸術に芸術的価値があるというわけではないが、ここでは特に多くの批評家から中傷、迫害されているラップ及びヒップホップの芸術的価値を証明することに力が注がれている。

本書は5章に分けられて論を構築しているのだが、まず最初の3章で芸術の哲学的な定義、その中のポピュラー芸術への批判や、それに対

する反論などが繰り返されている。そして「ラップの芸術」と題された4章目では、ヒップホップの中でも特にDJやサンプリングという手法、ラップのリリックの持つメッセージ性などからその芸術的価値を証明している。ただの学者とは思えないような筆者のヒップホップに対する認識の正しさと視点の鋭さに唸られる箇所が数多く見られるが、特に「スチッツァソニックの『That's All That Jazz』の全歌詞を掲載しての解説は、すべてのヒップホップへの批判に対しての明確な回答を提示しており、痛快ですらある。

この本を読み終えて気付かされたのは、ヒップホップの芸術的価値と共に、逆にすべてのヒップホップがその芸術的基準を満たしているわけではないという当然の事実だ。特に「コマーシャルなものなどに対する批判として、ヒップホップ内から発せられる『何がヒップホップか?』という定義の答えが、この本の中に書かれているように思える。かなり難解にはあるが…。

大前至

